

JSL 児童が苦手とする多義動詞と自他動詞の学習への実践 —「和語動詞カルタ」の活用—

細野尚子（横浜市立南吉田小学校）重千尋（横浜市立南吉田小学校）

1. 実践のねらい

小学生2年から6年の日本生まれ・育ちの日本語を第二言語とする（以下、JSL）子どもと日本語モノリンガル（以下、Mono）の子どもの簡単な和語動詞の産出を調べた調査（西川・細野・青木 2016）では、多義語、着脱動詞、自他動詞、名詞との結びつきが固定的な動詞などを含めた動詞を調査対象語とした。JSL の場合、Mono の得点には追いつかず、自身の経験の蓄積が Mono のようには習得に結びついていないことや JSL は、低得点層に多くの子どもが存在していることが明らかになり、インプットの頻度が課題の一つに上がった。そこで、「和語動詞カルタ」によって、インプットの頻度を増やし、苦手とされる多義動詞や自他動詞の用法を身に付けることをねらいとする。

2. 「和語動詞カルタ」について

前述の調査対象語の中から 20 語を選び新たに 28 語を加え合計 48 語の和語動詞による 115 アイテムのカルタを作成した。

3. 実践の場の特徴

横浜市立南吉田小学校は、全校児童の半数以上が外国につながる子であり、その数はここ数年増加している。休み時間などは同じ母語の子どもが集まっている場面が多

く、日本語習得がなかなか進まないのが現状である。

4. 実践の目標

絵の視覚的サポートにより、言葉と意味を結びつけるきっかけにする。繰り返し遊ぶことで多義動詞や自他動詞などの用法が定着することを目標とする。

5. 具体的な実践の内容とその過程

小学4年のJSLの子ども11名を対象に、質問票で調査し、「和語動詞カルタ」を、週1回程度、繰り返し遊び、2か月後にまた、質問票に答えてもらう。

6. 結果と考察

最初の質問票では、日本生まれと小学3年生で来日した子どもと結果が変わらなかった。「難しいけど楽しい」「もっとやりたい」という声が聞かれた。

